

特集●飛鳥田一雄インタビュー

市長・飛鳥田さんとわたし—田村明（法政大学教授）

昭和三十七年の暮もおしつまって、私はそれまでの仕事を捨てて大阪から東京へ帰ってきた。まだ新幹線もない時代、夜汽車であった。前途は不安が多かったが、都市づくりや地域づくりをするプランナーを一生の仕事にしようと思ったからである。

私のいなかった十年ほどの間に、東京の町は大誇張して、もはや住めるところはない。やむなく住んだのが横浜であったが、その時は、横浜とは何のかかわりもないし、飛鳥田さんも知らなかった。たまたま私の住んだアパートは山下公園の前の高層ビルで、港へ入ってくる海外船がよく見えた。町は寂れていたがこの近代文明の窓口であった横浜は、いつの間にか私の心をとらえていた。

私はまさに東京の大変貌、大変動の中で、東京から押しだされて横浜に住んだのである。すんなり東京に住んでいれば横浜とはそう深いかかわりを持たなかったのだろう。都市の変動による横浜住いが進路に大きな影響を与えることになった。

そのころ、横浜市長に飛鳥田さんが当選した。大阪の時代、飛鳥に近く住んでいた私には親しみのある名前だった。黒いジェット機や、全国最高点の少壮代議士という新聞記事も記憶にあった。

市長になった飛鳥田さんは、直接民主主義、市民参加、一万人市民集会を提唱した。それは、カビのはえたような感じのあった市役所イメージを吹き払うものであった。私も地方自治体や市民に民主主義の原点があるのを新鮮な気持で感ずるところがあった。

はじめて飛鳥田さんに会ったのは、たしか二十人ほどの学者と一緒に港湾局のランチに乗って海から横浜の視察をしたときであった。颯爽たる少壮政治家というイメージよりは、どっしりとした、それでいて漫画になりそうな親しみのもてる風貌だった。足の悪いこともその時はじめて知った。

だから私は初対面なのに、当時山下公園に高架の鉄道貨物線が建設され景観が台なしになることに文句をつけた。飛鳥田さんは以前から決っていたこと。費用などの点でやむをえなかったことを、まだ若造だった私に熱心に説明してくれた。納得できない点もあったが、とにかくエライ近寄りがたい市長ではなく、話のできる親しみのある人という印象であった。まさに市民参加を推進するのにぴったりの市長だったのである。

その後、私のいた地域計画の事務所で横浜の町づくり計画をたてることになった。都心部は戦災が引きつづく敗戦後の米軍の接収によって荒廃していた。郊外部は東京から押し出されてきた人口による無秩序な開発を防止できないで、横浜は人口が多いだけで自立性を失なった都市になっていた。これを横浜らしい個性をそなえた自立性のある都市にしなければならない。ただし市の財政は窮迫している。何とか新しい方法を考えて整備してゆかなくてはならない。私にとっては市民でもあり他の都市や地域の計画より身の入る仕事であった。

しかし、当時はまさか市役所に入るとは思ってもみなかった。昔、役人が何度かやって、もう役人はやめだと思っていたからである。それが、たまたま市に新しく設けられた企画調整局で"まちづくり"の仕事をするようになった。入ったその日からの初仕事は、すでに都市計画決定した高速道路を地下化して大通公園をつくろうという仕事であった。「今までの事情も知らずに新しく入った田村が市長をたきつけてできないことをやらせている」という評判が中央官庁の方からきた。しかし実際は飛鳥田さんの強いリーダーシップでスタートしたものである。ただ、私もあの四、五年前に話した山下公園の高架鉄道のことを考えて、これは何とかやらなくてはならないと思った。飛鳥田さんにも、山下公園の鉄道のことは心に残っていたのだろう。高速道路に対し「これは眉間の傷だ」といった。むずかしい交渉で何度か暗礁にのりあげそうになったし、苦しい山をいくつものりこえて教の大通公園が生れ、それが、くすのき広場、馬車道、伊勢佐木町ブルムナードなどの一連の町づくりをするきっかけになったのである。

飛鳥田さんの市長としての功績は、なんとといっても自治体を市民の個に立つ市民自治の主体として変えてゆくことを主張して実践したことである。もちろんそれは、憲法に記されており、戦後の民主的改革の中の重要な柱であった。ところが実情は、まだ戦前の姿から大きく変わってはいなかった。自治体に対する市民の関心や意識もうすぐ、中央官庁の下請出先機関のような形で運営されていた。自治体は市民に信頼されていないし、「お役所」的な仕事や雰囲気は脱してはいなかった。

それが現在では、全国どの自治体をもみても、市民参加を説かないところはない。自治体の体質もずいぶん民主化された。自治体や地方の主体性や自主性を説くところも多くなったし「地方の時代」が叫ばれている。もちろん、市民参加や、市民自治による自治体の変革は永遠の課題であるから、すべてがうまくいったとはいえない。しかし、二〇年前に市民参加が強い抵抗の下に提唱され、実行されたことを考えるとまるで違う国へ来たような気さえする。飛鳥田さんが、自治体にその本来の姿である市民自治による主体性ある路線を敷いたことは確かである。これまでの下請的官僚自治体を、主体的住民自治体へと転換させることにより、中央では十分扱えなかった公害防止、福祉、まちづくりなどの新しい課題の提起や、新しい手法が開発されていった。自治体は実質的に甦ってきた。新しい人材を自治体に引きつけることにもなった。

そうした中から生れた様々な横浜方式は、国に取り入れられ、全国自治体の範になったものも多い。現に、町づくりの手法について、今でも横浜を学ぶため全国から訪れてくる。それは政治的な保守・革新ではなく、自治体が市民の側に立って前例や形式主義にとらわれずに主体的に考えることによって実現されたのである。単に政党の利益特質だけに立っていたのでは、長い目に立った良い町づくりができるはずがない。

飛鳥田さんは市長選挙では一貫して社会党公認を名乗ってきた。しかし市長としては、まず市民的であって党派的是ではなかった。自治体として横浜として良かれという問題については、政治的立場の異なる人をふくめてあらゆる人たちと柔軟に話をし協力も求めたし、また市民のためには外部からの強い力もおそれなかった。だからこそ、私も新しい自治体の方策についてさまざまな試みを立案し、実行できたのである。横浜で生み出した「都市づくり」の方式は党派に関係な

く全国で評価されているし、大きな都市変動に対して適切な手法を生みだしたものである。飛鳥田さんの好きだった「地方が中央を包囲する」とはまさにそうしたことをいうのではないだろうか。各自治体が国ではできない問題に体を張って解決に当り、市民の信頼に具体的に応え自治体の総合的な自主能力を発揮し、ついには国をもそのような路線に乗らせ自治体を認めさせてきたのだから。

ところがそれにしては、あれだけ立派に全国のモデルになる都市問題に対応した横浜市の前市長であった飛鳥田さんが、その後大都市への展望や具体的な対応策を見失ってしまったのは不思議である。狭いイデオロギーや観念論では、現代のような複雑な都市、とくに大都市に対応できないことは、横浜時代はあまりにお自明のことだったはずである。じっくりと地域に根をはり、地域の実践によって成果をおさめてきた人が、地域を離れてから、市民も都市も見えなくなったとしか言いようがない。

それにしても、横浜を離れて選挙区まで東京へ移してしまったのは解せなかった。横浜こそ飛鳥田さんの生まれ、働いた地方なのに、それを捨てて中央へゆくのでは良いところを失うのも当然である。これでは「地方が中央を包囲する」どころか「中央による地方の解体」ではないのか。それに忘れてならないのは、東京だって地方のひとつであることである。東京一区はまさに私の生まれ育った所だが、そこに代議士、市長として三十年近くやってきた横浜の飛鳥田さんがなぜくるか。これでは東京一区という地方の住民は殴り込みかけられたようなもので、飛鳥田さんの言っていたことの正反対である。残念なことであった。

飛鳥田さんの仕事のやり方の特徴は、何ととっても具体的に考え、具体的に表現してゆくことであった。抽象的概念や観念ではなく、すべての施策はいかに市民に分かる形で、分かりやすく見せるかであった。むずかしい理くつや、役所的倫理に自己満足せず、常に具体的に表すことで、市民と自治体のつながりをもとうとしたのである。私も教えられた面が多いが、市民を去って委員長になってからは、逆に抽象的、観念的表現が目立ったのは、私にとっては全く意外であった。正反対なのである。私の知っている飛鳥田さんはいったいどこへ行ってしまったのだろう。

横浜では、いつも自由で楽しい雰囲気をつくりだしていた。民主的なリーダーシップとは、周りの人を愉しくさせること、そしてお追従、おべんちゃらでない自由で率直な意見を言わせることであろう。毎週月曜日の早朝に、市長を囲んで数人の首脳会議を開いた。議題に入る前に、いつもさまざまな話題での放談会をもった。笑声が絶えないなかなか楽しいものだった。そうした雰囲気が、重要議題に入ってから厳しい意見対立や、困難な障害に当たるときでも、最終的には首脳部の共通の連帯意識につながったと思う。けわしい意見の交換もあったが、そんな中でもよく冗談をとばした。私もいろいろな職場にいたが、上下に関係なく、こうした自由な発言をしあえる雰囲気は一般の役所や会社にはほとんどない。まるで自由業集団のような活発で楽しい雰囲気をもっていた。それが、どんなむずかしい課題にも、やってやろうという気をおこさせたのである。

若い人や現場の声も尊重した。会議の席で一番隅っこにいるこれらの人々をつかまえて直接発言させることがよくあった。それらの人々をやる気をおこさせるし、会議も実態にそくした実のあるものとなる。

飛鳥田さんは自身アイデアマンであった。よく両手水を掬うような手つきをして、「両手いっぱいアイデアがあるんだけど」と言っていた。しかし、市長の出したアイデアにも、みんなでその場で、そりゃ駄目だとか、問題だとか、平気で欠点を指摘し議論をした。市長ともによく討論になる。その中で消えてしまうものは多い。こんな自由な議論であるから、やるとなったものは皆も責任をもって実行する気になるものである。

反対意見もよく受け入れた。だから議論になるし、議論できるわけである。こんなことがあった。飛鳥田さんは「横浜の子供たちのためにプロ野球場をつくるのだ」といつも強調していた。場所は市役所の前の横浜公園にある古い球場の建て替えである。しかし、いろいろな問題が多くてそう簡単にはゆかない。はっきり反対論者も多かったし、私は慎重論であった。ところが住民やお客さんの前でも、「私はやる気だが、ここにいる田村くんは反対しているんだけどね」とニコニコしながら言っていた。ふつうなら内部不統一ということだが、あけすけに他人にも言うてしまうことが、かえって雰囲気をごやかにさせた。人徳であろう。だからこそ数年後に情勢が熟してきたとき、私はこの問題を全力でやった。市民の力による株式会社方式という結果的にみると最高の方法ですばらしいスタジアムが生まれたのである。もし時期でもないときに強圧的に市長が命令を下してもロクな仕事にならなかったろう。反対意見も受け入れることによって、けっきょく人をうまく使っていることになる。

ただ、人を使うという言葉は嫌いだった。「ぼくは他人を使ったなんて思ったことは一度もないよ。皆ぼくの仲間として一緒にやってくれたんだよ」といつもいっていた。それは口先ではなく、飛鳥田さんの人間味からでていた。

飛鳥田さんはよく人々に仕事を任せ、やる気をひきだした。「失敗をおそれずやれ」とよく言った。口ではそういうが、実際はそうでもない人もいる。それでは役所の人々は動かない。飛鳥田さんは一所けんめいやっている人々は文字どおりバックアップした。自治体では新しい仕事をやる以上、反対者や反撥者がいるのは普通である。それを事なかれという消極的姿勢では市民のために施策ができるわけがない。細かいことをいうのではなく、窮地に立った意欲ある職員の立場を守ってやるのが本当のリーダーシップではないだろうか。私も市に入った二、三年はよく方々とぶつかった。仕事をやろうとすれば旧来の方法を改めなくてはならない。止むをえない衝突、対立もあるし、こちらの手落ちのときもあったろう。そうしたとき、私の困った顔しているのを見て、注意をするどころか「どうだい、だいぶ楽しんだかい」といってはげましてくれたことは忘れられない。

「ぼくは政治がプロだが、君は都市のプロだ。都市づくりは最終的には君の意見に従うよ」といってくれた。事実、都市づくりに関しては委せてくれたし、かんじんな時には擁護してくれた。だからこそ、私も総合的で創造性のある今日でも都市づくりの手本になるさまざまな手法を実現できたのである。

つまり、飛鳥田さんは政治、私は“まちづくり”ということである。横浜はそれでうまくいったから、横浜のまちづくり以外のプロの政治の問題は私などが口を入れるものではないと思っていた。しかし、どうもそうではない。政治こそプロと称する政治家の独占物ではない。プロは固定的な観念の世界に立っていたり、そうかと思うと選挙の思惑で案外無原則な御都合主義をとった

りする。それは、アマの市民に分かりにくく、市民にとって政治を信頼できないものにさせてしまった。本当はアマの目で素直に現実を見つめる目が必要だし、その方が正当な判断のできることも多いのである。

実が自治体のなかにアマの市民参加をうったえ、市民意識をほりおこしたのが市長時代の飛鳥田さんその人であった。その流れを自らつくりだしながら、ご本人はやっぱりいわゆるプロ政治家になってしまっていたのだろうか。地方や都市のことを忘れてしまっていたのだろうか。

しかし、市民自治のまかれた種子は、いま少しずつ、揺いだ人の思惑を超えて全国各地に育ちつつあるように思える。

昭和 59 年 1 月 5 日発行（毎月 1 回 5 日発行）通巻 170 号

地方自治通信

自治体核心の創造と交流のための月刊誌

特集/飛鳥田一雄インタビュー

人生 所詮 ひとりぼっち

●補論

社会党の政策立案能力と書記局●上総三郎

「政治契約」・未整理ノート●須田春海

市長・飛鳥田さんとわたし●田村明

飛鳥田革新市政の総括のために●鳴海正泰

飛鳥田一雄去る●後藤喜八郎

〈資料〉

飛鳥田一雄と横浜市政・年譜

飛鳥田一雄委員長と社会党・年譜